イベントレポート
北海道スキーO

牛若丸・グスちゃんに勝つ

グスタフソン。来日以来無敗を誇るスキーオリエンテーリングの鉄人。誰もが越えられなかったその壁をひらりと越えたのは、スキーO の牛若丸・東北大学の堀江だった。

グフスタフソンを越えた！

（山田健一）

今回の大会のトピックスは 2 日目ロングディスタンスレースにおいて堀江守弘選手（東北大 OLC）が、来日以来 2 年間日本での Ski-O では無敗を誇っていたグスタフソン選手（春日部）に 3 分ものの差をつけて優勝したことです。日本人選手がグスタフソン選手を超えることは難しいだろうという予想にも関わらず、堀江選手がそれを打ち破ってくれたことは確実に Ski-O における選手のレベルが向上していることを示しています。敗れたグスちゃんは表彰式のインタビューでは茶目っ気たっぷりに自分が負けたのは堀江君のコーチが良かったからでしょうと悔しがっていました。（注、堀江選手は合宿等でグスタフソン選手のコーチを受けていた）堀江選手という若い力が台頭してきて来年の世界選手権が楽しみであります。（山田健一）

ブリザードのルスツ

（武石雄市）

1 日目は新雪・強風、ショートのスタート時刻が再三にわたり順延される。スノーモービルでトラックをつけても直ぐに風で消えてしまう。主催者の苦悩が聞こえる。

天候は快復しているし、折角、本州から駆けつけてくれた参加者に中止を告げるには忍びなく、結局、どうにかトラックが設置された 1 本のコースを全クラスが競うことになった。

ショートは J-Cup がかかっているので、当然、早いスタート時刻の者は不利だが、少ない運営者をかばいレースにはクレームがつかなかった。

2 日目もトラック状態は完全ではない。しかし、天気は良い。予定されたロングのコースは設定できなかったが、スタート時刻を少し延期して開催された。

だれも予想しなかった結果が出た。あのグスタフソン(本号オピニオン執筆者)に堀江が勝った。（武石雄市）

信じられなかった勝利

（堀江守弘：東北大 OLC）

1/19 のミディアム大会が終わり、次の目標はルスツで開かれるシュートとロングの大会となった。準備の期間は僅か一週間。体力面では体の疲れをとり調整するくらいしかできないが、頭の面ではまだまだやれることが残っていた。

先ずは昨年のルスツの地図読みをし、地形やコースの特徴をとらえた。さらに去年のラップ解析をじっくり見て、どのくらいの結果を出せるか目標を設定した。

去年の結果ではグスタフソンさんが飛びぬけてトップであり、そのあと日本人トップの丸山さん、宗形さんと続いていた。

スタート前の堀江選手

福島でのミディアムの結果から宗形さんとは同等の滑りができるだろうと考えた。目標としては丸山さんに勝ち、日本人トップになること。去年の自分に比べ、スキーの技術も向上しているし、体力もついている。さらに競技に対する考え方は180度変わっていたので、この目標は十分達成可能だろうと思った。しかし、丸山さんや宗形さんも去年以上に速くなっているだろうし、オリエンにミスはつきものである。だからやってみないとわからなかった。

グスタフソンさんに関しては何時かは勝ちたいが福島の結果を見てもまだ勝負するには及ばないだろうと思っていた。

1/25 ルスツ到着。前日の午後から車とフェリーでの移動で少々疲れはあったもののショートには影響ないと思っ

北海道スキーオリエンテーリング大会 2003 年 1 月 25-26 日

1 日目　ショート成績

M21A		
1	Bj　rn Gustavsson(春日部)	25:36
2	堀江守弘（東北大 OLC）	29:19
3	幸山敏克（青森県 OL 協会）	32:47
W21A		
1	酒井佳子（札幌農学校）	32:50
2	元木友子（Team 白樺）	38:45
3	高橋美和（水篤刈）	55:27
W35A		
1	大里真理子（京葉 OLC）	1:05:13
M50A		
1	武石雄市（Ski-O 研究会）	36:57
MB		
1	南茂哲也（岩手大 OLC）	31:12
2	熊谷智之（航走の会）	34:10
3	鈴木達夫（新横浜 R 倶）	39:17

2 日目　ロングディスタンス

M21A		
1	堀江守弘（東北大 OLC）	1:34:02
2	Bj　rn Gustavsson(春日部)	1:37:21
3	元木悟（Team 白樺）	1:44:34
W21A		
1	酒井佳子（札幌農学校）	1:24:13
2	元木友子（Team 白樺）	1:44:37
3	高橋美和（水篤刈）	2:09:06
W35A		
1	大里真理子（京葉 OLC）	1:22:08
M50A		
1	武石雄市（Ski-O 研究会）	1:14:53
M21B		
1	熊谷智之（航走の会）	48:14
2	南茂哲也（岩手大 OLC）	55:18
3	阪本紘一（岩手大 OLC）	1:07:12

た。予想外だったのは丸山さんが体調を崩したとかで棄権したことと積雪の影響でコース距離、スタート時刻に変更があったことだ。

実際スタートしてみて変更になるだけの理由は十分わかった。時折強い風が吹き、雪は非常に柔らかく前に進むのが困難だった。いくらポールで押してもポールが雪の中に刺さるだけでなかなかスピードが出ずあせった。だが、そんな状況は他の選手についても同じであり、結果として僕は2位に入った。

しかし、やはりグスタフソンさんは速かった。僕の 3 分後グスタフソンさんは 3 コントロールに行く途中ですでに僕を抜いて行った。2→3 というのはまさにポールの力だけで前に進む(ダブルポールの)レッグであり、僕はポールが深い雪に刺さってばかりで推進力を得られず苦しんでいるレッグだった。

フィニッシュレーンを滑る堀江

その夜、翌日に控えたロングのレースのことを考えながら、勝負はバスケット(ポールの下についている、いわゆる雪輪)にあると思った。グスタフソンさんは以前から大きなバスケットを使っていた。僕のはもともとポールについていた小さなものだった。コースの状況は今日とほとんど変わらない柔らかい状況だろう。それなら小さなバスケットは断然不利である。

しかし、今から新しいバスケットを買いに行けるわけでもない.なら自分で作るしかない、という結論に達した。

夕食はバイキングだったのでバイキングのときの恒例としてこっそりパンの持ち帰りといっしょに割り箸と紙コップを二つずつもらって部屋に帰った。結局紙コップは使わず、割り箸を半分に折ってバスケットにテーピングでくっつけた。外見は機の部分が丸見えで、何あほなことやってるんだろうくらいのものだった。

朝、会場に行ってみると工夫しているのは僕だけではなかった。成瀬ご夫妻もダンボールを使用し自作のバスケットだった。

レース前のウォーミングアップで試にポールを突いてみた。前日と比べそんなに変わったという手ごたえはなかったものの多少は違うだろうと思った。しかし、硬く圧雪されているトラックでは逆にポールが刺さらず使いにくかった。トラックの割合で柔らかいトラックの方が多いということがわかっていたので、僕は自作割り箸バスケットを付けたままスタートした。

この日、天気は比較的穏やかで時折太陽も見えた.いろんな地図で地図読みの練習をしてきた僕はそれほど大きなミスもなくレースを進めていけた。

途中で何人かの選手を抜く事ができたので良いレースをしていることはわかっていた。

ゴールしてみるとグスタフソンさんと幸山さんが既にゴールしていた。前日の結果からこの 2 人がライバルと思っていたので、近くにいたグスタフソンさんに思わず「What time?」と聞いた。聞いて直ぐグスタフソンさんは時計を持っていないことを思い出した。合宿でも大会でも時計を持っていない。日常生活でも腕時計はおろか携帯など時間がわかるものは何も持っていないようだ。すごく変わった人である。

グスタフソンさんは何分だったかわからないけどきっと自分より10分くらい速いのだろうと思いながら会場に戻った。

着替えをしていたら、「堀江君勝ったの？！」という声が聞こえてきた。慌てて速報の前にかけより結果を見てみると宿命のライバルであり、最高のコーチでもあるグスタフソンさんより上に自分の名前が載っていた。

信じられなかった。

けど、確かに勝っていた。

しかも、３分差で。

この結果には今でも驚きです。

こうして僕のルスツでの大会はハッピーエンドで幕を閉じた。

最後に、大会を運営してくださった皆さん、天候に左右されながらも僕たち競技者のために運営していただき、本当にご苦労様でした。そして、どうもありがとうございました。また、来年も、ルスツで競技できることを楽しみにしています。

（堀江守弘：東北大 OLC）

スキーO 上達中！

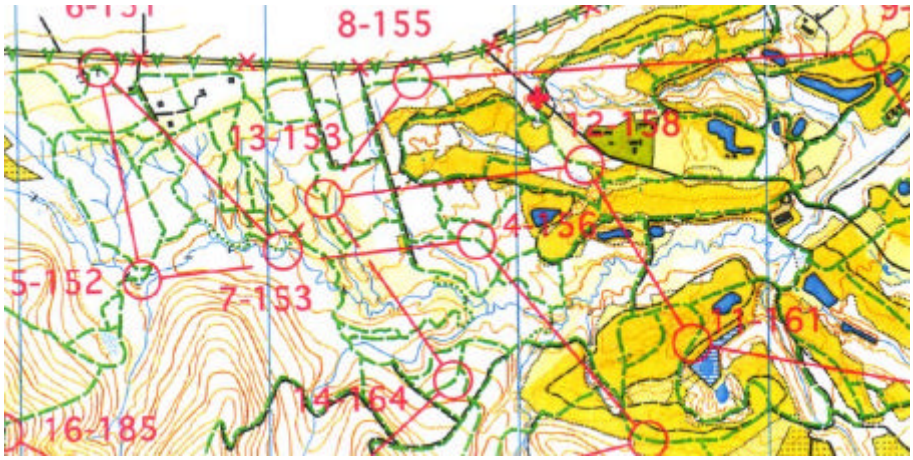
成瀬美希（チームパッシュ）

SKI-O?

初めて参加したのが去年のルスツ大会。難しかったけどとても興味深い大会だったので、夏のパークOの２戦を経て今年の福島大会、ルスツの大会に参加しました。

余談ですが、夫は現役のバイアスロン選手で、しょっちゅうスキーをしています。(仕事は？？？)また、アドベンチャーレースも楽しんでいます。

私も夏はトライアスロン、アドベンチャーレース、冬はクロカンレースなど。クロカンについては国体経験があるので(下手ですが)少しはできるかと・・・・



北海道スキーO 大会で勝負を分けた柔らかいスキートラック

私たちは、"体力はあるしクロカンなら出来る"と思い始めたのですが、毎回、毎回、オリエンテーリングに悩まされています。

福島のナイト０は雪明りがあるので、普通のヘッドライトで大丈夫だと思っていましたが、足元が暗く、マップも見えにくい等、ライトの重要性も感じました。

ナイト０では、夫より速くゴール！！、その夜は殿様気分でしたが、その後のレースについては悲惨な結果となりました。

次の日のレース、夫はコースがわからなくなったら、太い道に出て地図と現在地をあわせて走っていた様子。私は、どうしてもスキーが先行してしまい、どこにいるのかがわからなくなってしまい、何度もスキーツアーの子供とガイドに出逢い、そして一言「あの人迷ってるよ。どうしてこんな所で迷うの？」などと聞こえてきたときにはショックで"リタイヤしよう"と思う気持ちと"練習、練習"と思う気持ちとで、レースより自分の気持ちと戦っていました。多分、他の選手の３倍は走ったでしょう！！

そして一週間後のルスツの大会。悪天候の中でのレース、なんと、ゴール手前、地図には○があるが何度見ても数字が見つけられない。

？？これはポストのある記号ではない？と勝手に判断してゴールし失格！！今考えると途中で転んだり、吹雪だった為にマップホルダーと地図の間に雪が挟まっていて見えなかったか？慌てていて気が付かなかったのか・？と思います。

スキーをしながら地図を見ることに慣れていない私には、とても難しく距離感もつかめず、練習が必要だなと思いました。

夏のオリエンテーリングに参加して、また、来年のSKI-0にチャレンジしたいと思います。

W21Aで表彰された３名
高橋美和・酒井佳子・元木友子

ココはどこ？天候は味方せず

（山田健一：運営者）

気候の厳しい北海道の地でのレース。今回の１日目はおもいっきりその厳しき洗礼に見舞われてしまいました。

時折晴れ間ものぞかせるものの前日夜から厳しい風雪に見舞われ、数日前から苦労して踏み付けたモービルトラックもあっけなく埋没。トップスタート予定時刻の１時間半前、朝からモービルで必死にトラックを付けている信原（競技責任者）から私の携帯に悲痛な一報が入った。「踏んだ後から風で直ぐにトラックが消えてしまう。一番奥地のコントロールは使えない。コース短縮すべく地図を修正しておいてくれ」運営本部にいる私もこの吹雪では止むなしだなぁと空を仰ぐ。それから30分後再度携帯に電話が・・。「ダメだ。自分もどこをモービルで走っているのかすらわからない。もう競技にならない」「残念だが使用テレイン範囲を大幅に狭めて今日のＡクラスは全クラス同一コースのスプリントレースにしよう。そして未使用部分を明日のロングにとっておくのが残された選択肢だ」

使えるコントロールを精査した結果、W50Aの４コースを使用することに決定。今年は地図であたふたしたくなかったので事前に印刷業者に出して全コース図が完成していたが裏目に出た。コスト増に目をつぶりせっかく用意した地図が全て裏紙にしか利用できなくなった瞬間だった。そして、最高のテレインを提供すべく昨年から毎週のようにルスツと札幌を往復し、参加者からコースを絶賛してもらう運営者としての夢も砕け散った瞬間であった。

参加者にスタート時刻を繰り下げコースがA・Bの２コースのみのレースとなる旨を説明。参加者も「この天気じゃねぇ」とあきらめ顔。私は遠方から参加してくれた参加者に申し訳なく思いつつ肩を落として今年もまた留寿都村のコンビニへカラーコピーをとりに走ったのだった。

レース中のこの天候は参加者にとっても厳しかったようだ。私はスタートとその背後にあるラスポを通過する選手の様子をビデオ撮影していたのだが、吹雪により視界が悪化するとピステ道といえど雪原との境界がわからなくなり立ち止まってしまう選手が多かった。特に撮影していて不運に思えたのは成瀬美希選手（チームパッシュ）。彼女はトライアスロン系の出身で昨年のJ-Cupに初参加し、夫婦共にSki-0の面白さにハマり今回は国体予選を蹴ってまで参加してくれたのだが、クロカンスキーはトップレベル（本大会の２週間後の札幌国際スキーマラソンでなんと優勝）の彼女もオリエンテーリングの技術は今一歩であり今後に期待がかかる選手。ラスポを目指して軽快に滑る彼女の前を突如ブリザードが襲いホワイトアウト状態になってしまいラスポを発見できず、この辺にあるはずとまごまごしながらもそのままゴール。結果ペナとなり失格になってしまったのだ。

スノーシューで駆け抜ける
熊谷智之選手（航走の会）

明けて２日目は天候も回復し晴空の下、さわやかなスキーオリエンテーリングを楽しめたようだ。ただ、コースは急遽変更となったためアップの多いタフなコースとなってしまったのは否めない。

運営ヨタ話

昨年のJ-Cup大会は北海道協会だけでは大会開催が無理なのでSki-0研究会が道内での開催定着を期待し先鞭を付けてくれたのであった。

今回は運営経費圧縮のため北海道協会主催で道内の運営者のみで開催をしたのだが多くの課題を残した。運営レベルは言わずもがなだが、そもそも運営者を集めるのも困難をともなった。実質私と信原の二人だけで準備したと言っても過言でない。

Ski-0の運営者として求められる資

質として「地図が読める」「クロカンスキーに乗れる」「スノーモービルに乗れる」の 3 つが挙げられると思うが私はモービルを運転できず競責の信原にその殆どをまかせっきりになってしまったし、自嘲気味になるが私も Ski-0 の経験が浅く「この運営責任者にしてこの大会あり」と言われても仕方がない。コース圧雪ができる人材が他にもいれば初日はともかく 2 日目はもう少しテレイン範囲を拡大できたかと思う。

今回の日程を決定するにあたり前年のような三連休での開催は運営負担と参加者の遠征費軽減を狙って敬遠することにしたが結論から言えば今回の日程は失敗だった。やはり遠く北海道の地に道外から来られる参加者には三連休のニーズが強く、昨年の参加者を再度取り込むのには不適切あった。また、１月下旬は学生は試験中にぶつかるし、札幌近郊のクロスカントリースキー大会ともぶつかり道内の参加者も取りこぼしてしまった。当初 100 名の単日参加者確保を目標としたが下方修正を重ねつつ結果、単日参加者約 30 名。準備の苦労の割にはなんとも寂しい大会であった。

次回大会に向かって・・

数々の問題点を反省と対策しつつ来年は再び 1 月三連休での開催を予定している。おそらく来年の世界選手権最終選考レースの指定となるだろうし、その負託に応えられる競技レベルを提供しなくてはならない。Ski-0 に関しては無視を決めこんでいる JOA にも公認大会として共催を打診しているがこの記事が掲載される頃には JOA の態度と方向性が明らかになることだろう。

今回、競技についてはスノーシューの足跡穴がスキーの邪魔となりクレームとなった。スタート順の速い選手は不利であったことも否めない。スノーシュー参加者は全て B クラスで単日 5 名。両日ともスキー参加者よりもスノーシュー参加者の方が上位を占めた。スキーとシューの巡航速度は当然スキーが勝るが、それも自在にスキーを操れればの話である。雪の降らない地方でのオリエンティアはクロカンスキーを練習し上達してからでないと Ski-0 の大会が楽しめないのではあまりにも Ski-0 大会の敷居は高すぎるし、いつまでたっても参加者は増加しない。別に全員が選手権選考を目的としているわけではないのだし、ちょっとスキー（シュー）でオリエンテーリングをしてその後スノボやアルペンスキーをしながら北海道リゾート気分を味わうといったニーズ層をルスツでは汲み取ることができる。いずれにしても大会参加者増は危急の課題であり、イベントとしてこの大会が存続していくためにもあらゆる層への参加を呼びかけていかなければならない。よってスキー競技の邪魔にならぬよう配慮しつつもスノーシュー参加者は積極的に募るつもりである。てっとり早いのは道内在住のクロカンスキーヤーやアドベンチャーレーサーにオリエンテーリングを理解してもらうことなのかな？

「去年の参加者（単日約 70 名）がやっぱり最低ラインだよ・・」施設利用を許諾頂いたルスツリゾート係長の言葉が今も耳から離れない・・。来年の最低目標はやっぱり 100 名である。読者のご参加をお待ちしています。

（山田健一）

マップ交換所での柴田達真選手と逃げ切る宗像竜憲選手（奥）